

2025年度
第2号

医学教育センターニュース



編集・発行 愛知医科大学医学教育センター ～Sep. 2025～

◆医学教育センター各部門からのご報告

これからの臨床講義

診療の現場では依然として感染予防が求められていますが、社会全体としては概ねコロナ禍以前の様子に戻りつつあります。コロナ禍の間はオンライン講義が少なくありませんでしたが、現在は以前のように対面での講義が主体となっています。オンライン講義の利便性は確かにありますが、やはり対面講義には非言語的なコミュニケーションが含まれ、講師の先生方の迫力を直接感じられる点で非常に有意義だと思います。

一方で、オンラインの特性も今後さらに活かすべきです。例えば、オンデマンド配信を取り入れた反転講義は、愛知医科大学においても導入を検討する価値があるでしょう。また、垂直統合・水平統合を一層推進することで、より総合的な学修が可能となるカリキュラムの構築が期待されます。

もちろん座学は一定の基盤として重要ですが、それだけでは学生が自ら学修する態度を十分に涵養することは困難です。今後も皆様のお知恵をいただきながら、臨床講義の在り方を模索していきたいと考えております。

小児科 教授 奥村 彰久

新カリキュラム実施2年目を迎えた初年次教育

2024年度から、新しいカリキュラムが開始されました。本稿では1年生対象の初年次教育について振り返ってみようと思います。

新カリキュラムの基本方針は「総単位数を減らし、講義の分量を整理する」です。特に1年生については、従来の48.5単位から43.0単位に減少しました。講義コマ数でいうとおよそ70コマ程度減少したことになります。年明け以降に行っていた基礎医学の講義を12月までに完了し、理系の一部科目を前学期のうちに終わらせるように改訂されました。講義で教えるよりも、学生たちが自主的に学んでいくことを目指していくもので、1年生たちも放課後遅くまでオレンジなどを使い、学修に励んでいます。

1年目での実践を経て、今年度はマイナーチェンジをしています。新入生にICT活用での学修について講義する「ICTリテラシー」において初日の講義で文章表現の演習を取り入れました。生成AIと付き合いながら学修をしていく時代となり、文章作成においても本質的な力が必要になります。われわれ初年次教育担当教員は、最新の知見を取り入れ、教育内容を向上させることに努めていきます。

臨床前教育部門 基礎科学・初年次教育部門グループ長

教授（特任） 橋本 貴宏



◆第3回 FD講演会

6月10日、本年度第3回目の医学部FDは、MECの塩澤昌英先生をお招きし、「第119回医師国家試験の傾向分析」と題して講演会を開催しました（対面、Webを併せて79名の参加者）。塩澤先生からは、昨年度の国家試験出題傾向を概説していただき、今年度の予測と対策などをお話し頂きました。本学の国家試験対策や卒業試験のあり方などにもコメントを頂きました。



引き続き、指導講座制度について情報共有をしました。渡邊先生（救命救急科）と高村先生（感染・免疫学講座）より、どのように指導学生と交流しているかを情報共有しました。指導学生は複数の学年が対象となるため、同じ日程で集合するのは難しい反面、普段は中々話す機会の無い先輩・後輩と交流する良い機会にもなっているようです。学会への参加、研究活動への参画など、講座毎の特色を出し、学生支援をして頂ければと思います。



医学教育センター長 早稲田 勝久



◆第5回 FD講演会

9月11日、本年度5回目のFDが開催されました。今回は、分野別評価2巡目に向けて、キックオフという位置づけで行いました。本学は、准教授以上の教員が、領域1から8までのいずれかの領域に属し、領域リーダーのもと、年次報告書や自己点検評価書を作成します。FD当日は、医学部長の挨拶後、医学教育センター長から、分野別評価の位置づけや目的などを、参加された先生方と改めて共有しました。また、自己点検評価書の作成、コアメンバーによるブラッシュアップなど、受審までに今後すべきことを参加者と共有しました。その後は、領域毎に分かれて、各領域で、自己点検評価書を作成するにあたり、役割分担や根拠資料の集め方などを、担当事務職員と共に確認をしました。



2巡目の実地調査は、来年度10月19日から23日が予定されています。忙しい1年になりますが、皆様のご協力をよろしくお願いします。

医学教育センター長 早稲田 勝久

◆第4回 FD講演会

7月30日に医学部第4回FDが開催されました。今回は臨床講座の先生方にご参加いただき、「臨床実習教育」をテーマとして行われました。はじめに早稲田教授（医学教育センター）より、現在の医学部で進められている臨床実習教育についてお話しいただきました。近年は診療参加型臨床実習が推進されており、学生が診療チームの一員として実際に診療業務を分担しながら、医師として必要な知識や思考法、技能、そして態度を身につけることを目的としています。これは、講義や見学を通して知識を得るだけではなく、実際の患者への診療活動を経験することで、医療現場で必要となる診断や治療に関する臨床推論力や対応力を養うことを目指すものです。

次に、実際に各診療科で行われている実習内容について、皮膚科、産婦人科、循環器内科の各科より共有しました。渡邊教授（皮膚科）からは、学生による初診患者の診察について紹介がありました。初診患者が多く来院する皮膚科外来では、学生が問診を担当することで診療の戦力となり、学生自身も実践を通して臨床能力や経験を積むことができるとのことでした。その結果、教員の負担が軽減され、学生が診療チームの一員として役割を果たしている様子が伝わりました。藤本先生（産婦人科）からは、今年新たに着任された大須賀教授とともに、実習内容を一新されたことが紹介されました。ドラマ「コウノドリ」を視聴するCine Education（シネエデュケーション）の実施や、実際に使用される手術・検査器具を体験するプログラム、男子学生が内診台に乗ることで患者の気持ちを理解する試みなど、斬新で多彩な取り組みが盛り込まれていました。また、実習の最初と最後に問題を解き、実習を通してどの程度成長したかを確認する方法や、学生から指導医への評価を行う仕組みも導入されており、大変興味深い内容でした。私からは、循環器内科でMini-CEXを用いながら、学生が初診患者に対して医療面接から臨床推論、身体診察まで一連の流れを実践してもらった実習内容を共有させていただきました。また、クリクラBの第7クールで循環器内科を選択した医学部6年生の後藤綺亜さんからも、実際にMini-CEXを経験した感想や実習に対する思いを語っていただき、学生目線からの貴重な話を伺うことができました。今回のFDを通して臨床実習として日常的に学生が患者診療に参加することが必要であると改めて感じました。藤本先生からは、「手間も時間もかかって大変ではあるが、その分、医局説明会にはたくさんの学生が参加してくれるようになった」というお話もありました。学生は将来、医療を共に担っていく大切な仲間です。共に育っていくという意識を持つことが、教育や診療の質の向上につながると考えています。先生方にはご多忙の中とは存じますが、今後とも診療参加型臨床実習へのご理解とご協力を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

循環器内科 医員助教 松尾 幸果



◆臨床実習後OSCE

7月12日に6年生を対象とした臨床実習後OSCEが実施されました。この試験は、医学生が診療参加型臨床実習において十分な臨床能力を修得できているか、つまり臨床研修を開始して良いかどうかを評価する試験です。本学は、共用試験実施評価機構の課題（機構課題）3題と各大学独自の課題3題を実施しました。機構課題は、1課題16分間（医療面接と身体診察：12分間、情報整理と指導医への報告：4分間）という限られた時間の中で、医療面接と身体診察を行い、鑑別疾患を思い浮かべて、指導医へ報告するという形式です。機構課題に対しては学生も十分に対策をしてきており、多くの学生が対応出来ていましたが、大学独自課題においては、対応に苦慮している学生が散見されました。

臨床実習の充実により、これらのOSCE課題への対応が自ずと可能となるはずです。JACMEの実地調査でも、“真の”診療参加型臨床実習が求められています。今回の臨床実習後OSCEの結果を各科で共有していただき、今後の臨床実習の充実に活かして頂ければと思います。最後に、模擬患者さんを始め、多くの職員の方々に運営スタッフとして携わって頂きました。改めて皆さまのご協力に感謝致します。

医学教育センター長 早稲田 勝久

◆共用試験（CBTと臨床実習前OSCE）

4年生で実施されている共用試験（CBTと臨床実習前OSCE）は、2023年度から公的化試験となり、合否判定基準を含めた試験運営が全国统一基準で実施されています。共用試験に合格することが臨床実習に進むに当たり必要になるだけでなく、医師国家試験を受験する際の要件にもなっています。

CBTは、8月21日に本試験を実施し、117名の4年生が受験しました。ここ2年ぐらいは、8名ほど再試験対象者がいます。早めに準備を開始することと、広い範囲が試験範囲となった場合の勉強の仕方に早く順応することが重要と思われます。

OSCEは、8月30日、31日に実施されました。今年は、1日目に「頭頸部診察」「神経診察」「救急」「全身状態とバイタルサイン」「基本的臨床手技」「感染対策」を、2日目に「胸部診察」「腹部診察」「四肢と脊柱診察」「医療面接」を実施し、全10課題を実施しました。多くの評価者、模擬患者（本学模擬患者会や他大学学生ボランティア、職員）や事務職員の皆様にご協力いただき、無事に終えることができました。OSCEの実施に当たり、評価者不足が毎年問題となっているため、新たな認定評価者の養成が急務です。各講座におかれましては引き続きご協力の程宜しくお願い致します。

医学教育センター長 早稲田 勝久



◆基本手技・医療面接実習について

2025年度においても、4年生基本手技・医療面接実習を4月下旬から6月末にかけて毎週金曜日午後の日程で実施いたしました。本実習は2023年度より期間・回数を拡充し、実習者がより多くの経験を積める体制を整備しており、今回で3年度目の実施となります。この変更により、従来の短期集中型から段階的学習型へとシフトし、実習者の理解度向上と技能定着の促進を図っています。私は科目担当者として全体の実施状況の視察を行うとともに、基本的臨床手技の領域リーダーとして実習者への直接指導にあたりました。総評として、多くの実習者が実習に対して前向きで積極的な態度を示していたことは非常に評価できる点でした。質問も活発で、実践的な場面での応用についても意欲的に取り組む姿勢が見られました。一方で、事前学習の不足が課題として浮き彫りになりました。実習の時間的制約を考慮すると、事前に配布された動画教材や学修・評価項目について十分に予習し、実習時には既習内容を「確認・応用する」段階に進むことが理想的です。しかしながら、実習当日に初めて動画教材を視聴したり、学修・評価項目を確認したりする実習者も散見されました。このような準備不足は、限られた実習時間の効果的活用を阻害し、本来習得すべき技能レベルに到達することを困難にする要因となっています。事実、8月22日～28日にシミュレーションセンターを開放して実施したOSCE前自主練習で視察・指導をしたところ、基本手技・医療面接実習で学習した内容が十分に定着していない、または適切に修得できていないと思われる参加者が少数ながら確認されました。しかしながら、8月30日および31日に実施された臨床実習前OSCEにおけるパフォーマンスを総合的に評価したところ、最終的には多くの実習者が十分な診療技能と適切な医療従事者としての態度を修得できていたものと判断しております。本実習は、臨床実習前OSCEに合格し、その後の診療参加型臨床実習において実践的な学習を行うための基礎となる重要なプログラムです。本実習で培われた知識と技能が、今後の臨床実習をより実りあるものとし、将来医師として歩む学生一人一人の職業人生の確固たる基礎となることを強く期待しております。最後に、本実習にご協力いただいた模擬患者の皆様および指導医の先生方に深く御礼申し上げます。

シミュレーションセンター 准教授 森下 啓明



◆学修支援勉強会（2025年度後期）

学修支援は、1年生から4年生までの、留年した学生や進級したものの学力に不安のある学生を対象とした勉強会です。2025年度後期の学修支援勉強会は、4年生が臨床実習を開始するため、対象は1年生から3年生となります。

1・2年生の学生は、それぞれ割り当てられた講義の中で重要だと思った図を1～2個選び、その図について説明や重要な点を自分なりにまとめたり、関連する内容を補足したりしたものを事前に提出します。勉強会当日は、そのまとめをホワイトボードに書き、班のメンバーに説明します。

3年生の学修支援参加者は、後期では対象者ではなく、自主的に参加を希望した学生がほとんどです。そのため、試験勉強にとどまらず、4年生に向けてチューターの先生とともにCBT予想問題を解く取り組みも行っています。自主的に参加するだけあって、多くの学生が熱心に先生に質問しており、低学年の頃とは異なる成長を感じました。

一方、2025年度前期の学修支援勉強会では、一部の2年生がアルバイトや部活動を理由に無断欠席する事例が見られました。そのため後期のガイダンスでは、今何を優先すべきかを考えるよう促しました。課題提出についても、期限内に提出するのは当然であり、授業を聴いたうえで自分の言葉でまとめることによって初めて疑問が生じたり、理解が深まったりすることを説明しました。私たち教員は全力でサポートしますが、学生自身が「月曜日6限目の70分間を有意義に過ごしたい」という気持ちを持つことが何よりも大切だと思います。

最後に、毎回快くご協力くださる基礎科学・基礎医学・臨床医学の先生方に心より感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

医学教育センター 准教授 河合 聖子

◆多職種連携演習（IPE）2

本学の多職種連携演習は、1～4年生の各学年1回ずつ、看護学部、名城大学薬学部、名古屋学芸大学管理栄養学部の4学部で実施しています。9月12日、2年生を対象とした多職種連携演習を、医学部112名、看護学部129名、薬学部13名の計254名で実施しました。本演習は、ここ数年は、脱出ゲームを通して、チームとして課題に取り組むことをテーマとしています。脱出ゲームを行うにあたり、浅田先生（自治医科大学）と村岡先生（藤田医科大学）に多大なるご協力を頂きました。多くの学生がはじめてチームとなった状態でしたが、脱出ゲーム開始後は、自身のもつ情報を共有しながら、前のめりにグループで話し合いをしているのが印象的でした。こういったチーム力を、日常の学生生活や将来の医療チームに活かして欲しいと思いました。

医学教育センター長 早稲田 勝久



◆選択講座（前期）

2025年度前期の選択講座（22講座）が終了しました。通常授業の補完・発展領域や臨床への導入、医学研究領域、キャリアプランに関連する内容など多様な講座が開講されました。

講座等	担当者	テーマ
感染・免疫学講座	高木 秀和	寄生虫よもやま話
病理学講座	中村 律子	病理学実習追加
肝胆膵内科	荒井 潤	英語学習で広がる世界観～3度の海外留学経験を通して～
数学	橋本 貴宏	EZRで統計解析
IR室	佐藤 麻紀	Excel基礎講座：実験データの可視化と統計検定
感染・免疫学講座	高村 祥子	自己免疫疾患モデルマウスを見てみよう
生理学	増淵 悟	アメリカの医療を考える
医学教育センター	河合 聖子	基本から学ぶ胸部レントゲン読影講座
臨床研究支援センター	大橋 渉	医療法人のためのマーケティング
分子医科学研究所	幡野 その子	「食べる」を考える。
災害医療研究センター	津田 雅庸 他	災害医療について
総合診療科	山本 さゆり 他	ストレス関連疾患「心身症」とはなにか？(1)
消化管内科	小笠原 尚高	OSCEに役立つ腹部診察を実践的に学ぶ
医学教育センター	山口 奈緒子 他	主体的な学びを活かす（立案編）
消化管内科	小笠原 尚高	内視鏡の世界を覗いてみよう
肝胆膵内科	伊藤 清顕	肝胆膵内科の先端研究
循環器内科	内藤 千裕	心電図、心エコー、心不全の基礎
臨床研究支援センター	大橋 渉	文字情報をぶった切る！文字情報を統計処理するテキストマイニングを学ぼう
数学	橋本 貴宏	ICTを活用した学修法とプレゼンテーション
医学教育センター	早稲田 勝久、伊藤 清顕	医学生のための起業セミナー：起業家・研究者に話を聞こう
医学教育センター	早稲田 勝久 他	介助犬をもっと知ろう
脳神経外科学講座	渡邊 督 他	脳神経外科キッズニア

「介助犬をもっと知ろう」

7月28日に選択講座「介助犬をもっと知ろう」を実施しました。受講者は2～4年生で、3・4年生19名、2年生17名の二組に分けての実施です。本講座では、長久手市にある介助犬総合訓練センター～シンシアの丘～を訪問しました。シンシアの丘は日本初の介助犬専門の訓練センターで、本学卒業生の高柳友子先生が代表者として尽力されています。3時間の講座の中で、高柳先生から介助犬や関連する社会状況、そしてご自身のキャリアについて幅広く教えていただき、介助犬とトレーナーによる訓練デモンストレーションも見学させていただきました。また、介助犬使用者から経緯や想いなどを伺う機会も設けられており、質疑応答では学生の様々な質問・疑問に快く応えていただきました。高柳先生の熱意、そして介助犬と一緒にご自身の夢を実現されている介助犬使用者の体験談は、学生にとって強く印象に残ったようです。参加学生からは「障害のためにできる・できない』ではなく、『このサポートがあればできる』ということ、を、医師として提供できるようになりたい」、「患



者さんにとってどんな医師と出会うかで人生が大きく変わることに気づいた」などの感想がありました。介助犬についての学びを通して、将来の医師としての自覚やモチベーションに繋がるだけでなく、キャリアパスについて考える貴重な機会となりました。

薬理学／医学教育センター 准教授 山口 奈緒子

◆インターンシップの受け入れ

7月16～18日と29～31日の各日程3日間で、名古屋高校と南山高校女子部から計10名の高校生を受け入れました。両日程ともシミュレーションセンターや救命科、脳神経外科、呼吸器外科、内科外来、放射線部・生理検査部・薬剤部、加齢医科学研究所、解剖学講座、OB・OGの若手医師との座談会など、多くの部署や診療科にご協力いただき、大変充実したスケジュールとなりました。

高校生たちの多くが医療に携わる仕事に興味を持ち、本学へ来てくれたようです。みんなで緊張しながら手術見学に向かったり、期待に胸を膨らませてドクターヘリに乗ったり、加齢医科学研究所で畏れながらも本物の人間の脳に触らせてもらったり、シミュレーションセンターで私たちも驚くほどの集中力で縫合実習や採血実習をしたりする姿はとてもまぶしく、医療の未来は明るいと感じさせてくれました。

各部署の見学に加え、学校提出用のレポート作成の時間も設けました。みんなそれぞれに体験を振り返り、感じたこと・考えたことを書いてくれました。南山高校女子部の皆さんは夏の肌を刺すような暑さと緊張で大人しく控えめな印象でしたが、レポートでは自ら感じ取った「チーム医療」の大切さを記してくれていました。患者の生活に目を向けることや、医療従事者として大切にしなければならない倫理観、将来挑戦したいことまで書き記しており、視野の広さと聡明さに感心しました。名古屋高校の皆さんは、全日程大雨だったにも関わらず、明るい元気な挨拶が印象的でした。各部署での見学を通じ、医療従事者を志す思いをよりいっそう強めたことが伝わってきました。最終日にはレポートを後回しにして、関わってくださった先生方へイラスト入りの寄せ書きを作り始めるほど良い経験になったようで、その素直さと温かさに胸を打たれました。

高校生たちと関わる中で、逆に私自身が初心を思い出させてもらう良い機会となりました。ご協力いただいた先生方、お忙しい中お時間をいただき大変感謝しております。医療に携わる未来の後輩育成のため、来年以降もインターンシップにご協力いただけますと幸いです。

小児科 専修医 西尾 麻友子

医療職に興味を持つ高校生にとって、実際の病院での体験は大変貴重な機会です。今年も多くの先生方にご協力いただき、医療現場を肌で感じられる充実したプログラムとなりました。シミュレーションセンターでの縫合体験では、高校生が自ら針と糸を手に取り、真剣な表情で一針一針縫い進めていきました。初めは緊張で器具の持ち方にも戸惑いが見られましたが、回数を重ねるうちに手つきが慣れ、最後には「もっとやりたい」という声が多く聞かれました。ドクターヘリ見学では実際にヘリポートを訪れ、離着陸や機内設備を間近で見ることで、緊急医療の現場をよりリアルに感じることができました。活動内容や現場でのエピソードを伺うと、高校生は熱心に耳を傾けていました。3日間の経験を通し、「命を救う行為の重みを実感している姿がとても印象的でした。高校生からは「実際に体験することで医療職への憧れが強くなった」「将来の進路を考えるうえで参考になった」といった感想が寄せられました。また、最後には



一部の学生からサポートして下さった先生方へ寄せ書きをいただき、感謝の気持ちが温かく伝わり、スタッフ一同大変嬉しく思いました。今回のインターンシップが、高校生の夢や目標をさらに大きく育むきっかけとなり、将来医療を支える仲間へと成長していく一歩となれば幸いです。

循環器内科 医員助教 松尾 幸果

◆第57回医学教育学会

第57回医学教育学会が秋田（秋田大学、2025年7月25～27日）にて開催されました。今年度の基調テーマは、「次世代の医学・医療を拓くデジタル教育の新たなステージへAll for Patient, All Together—理想的なチームビルディングを目指して」であり、医学教育のデジタル化や生成AI関連のシンポジウムや講演などが数多くありました。今年度から従来の2日間（プレコングレス除く）の開催から3日間に変更され、数多くのシンポジウム、ワークショップ、一般演題がありました。一般演題のポスター発表は、eポスターによる発表形式になり、当日の発表だけでなく、オンラインにてスライドの閲覧が可能となりました。

医学教育センター関連の一般演題発表（eポスター）では、「臨床実習の評価システムを臨床実習の充実に活かす」（早稲田）、「学修支援勉強会への参加を継続させるための工夫：事後調査から見える学生の本音」（河合）、「ロールプレイを活用した薬理学教育：単独実施と2大学合同オンライン実施の比較」（山口）、「医学部新入生向けICTリテラシー科目の教育実践」（橋本）、「初期研修医と研修先指導医によるコンピテンス評価での教育プログラム改善の可能性」（佐藤）がありました。

学会会場前の千秋公園のお堀では蓮の花が見頃を迎えており、日中また夜間のライトアップは幻想的な風景でした。秋田竿灯祭り直前であったため、会場前の広場にて竿灯練習会もあり、学会の懇親会では男鹿半島のなまはげ太鼓も鑑賞することができました。

来年度の医学教育学会は、富山（富山大学、2026年7月31日～8月2日）にて開催予定です。ご興味のある方は是非お声がけください。

IR室 講師 佐藤 麻紀

